

⑥ 長原孝太郎の死去

「学校近事」(49頁)にも記されているとおり、昭和五年十二月一日に西洋画科教授長原孝太郎(号止水)が死去した。止水は同年の帝展に「明星」を出品し、その後明治神宮聖徳絵画館の壁画を制作中であった。葬儀は三日に本郷動坂町の自宅で行われ、十七日西洋



長原孝太郎
『東京美術学校校友会月報』第29巻第6号より転載)

画研究科有志
発起による追
悼の集いが催
された(『東京
美術学校校友
会月報』第二十
九巻第七号「芸

苑彙報」欄)。
長原は西洋画基礎教育課程の指導者として生徒に親しまれた。次の回想記にもそれがよく現れている。

或日のこと

野間仁根 大正十四年西洋画科卒

〔字備料〕
子科一年と言ったと思うがその頃級友諸君の如く時間通り眞面目に教室で石膏写生などは得手ではないからピンポンを遊んだりモデル嬢とふざけることの方が多かつたのである、或日のこと、さんざ遊び疲れてから教室えはいつて行くと級友は皆ポカンとしている。

おい野間、大変だ。今長原先生が来られてお前の絵を賞めて行かれたぞ、というのである。

そうだろう俺の絵は良いからなあ、それ位のことは平気で言う程は恐いものなしの楽道家だったのである、そんなことがあつてから或日のこと先生は次の様に教えて下さったのである。

「お前の描くデッサンはとてもなつてない形も変だし調子も間違っている、しかしなにかお前の感ずるところを描いているのは正しいことだと思う、いづれ絵のことだから段々うまく描けるようになるだろうが、この氣持を忘れるなよ、絵とはこうしたものなんだよ、歳とつても忘れるなよ」

こうして、この変な妙チクリンなデッサンについて、絵の根元のことにも及んで懇切に教えて下さったのである。そして今もなほ先生の御恩に感銘して忘れないつもりである。

二科会に夜の床という当時では大きな画布だったが、この絵が入選した時、先生が非常に激賞して下さったので、なにより私は先生のお氣持がうれしく感泣したことである、これは寺内万次郎氏を通じて聞き知ったことであつた。

(『芸術大学新聞』第七号。昭和二十六年四月十五日)

⑦ 下村観山の死去

昭和五年五月十日、もと本校教授下村観山が死去した。『東京美術学校校友会月報』第二十九巻第二号には旧友島田佳矣、溝口宗文、六角紫水の追憶談が掲載され、文庫では六月十三日から二十日まで観山の本校卒業前後の作品と横山大観、関保之助、溝口宗文、島田佳矣、白浜徴、鈴川信一、天草神来、菱田春草、西郷孤月ら同窓生の作品を陳列した。なお、翌六年二、三月には東京府美術館で

遺作展覽會が開催された。

⑧ 竹内久一銅像除幕式

昭和五年五月三十一日、校庭に沼田一雅原型制作による竹内久一の銅像（胸像）が建立された。『東京美術学校校友会月報』第二十九卷第三号が除幕式の模様を次のように伝える。

故竹内久一先生銅像除幕式 豫〔かねて〕而本校々庭に建設中なりし故本校教授竹内久一先生の銅像は、先頃竣工したるを以て、五月三十日午後二時半より、遺族関係者並に彫刻科卒業生等約五十名參集して、莊嚴に舉行せられたり、式は令息の除幕に初まり、發起人を代表して、小倉右一郎氏の経過報告あり、次に正木「直彦」本校長は大要左の如き一場の祝辭を述べらる。

故竹内教授は明治美術史の主要なる一部分を擔當した開拓者の一人である。それは從來職人であつた彫刻家を美術家としての地位を建設〔にまで向上させた〕した事であつて、夙に奈良研究に着眼して、恰も鎌倉時代に天平の彫刻の復興を行つた様に、明治時代に奈良美術の復興を確立した大立役者であつた。作家としては雅俗に互つて趣味の廣汎な人であり、教育者としては懇切な友情の厚き指導者であつた。今日銅像に依つて風貌に接した様に思ひ、追憶の念に堪え無い次第である。

次に島田佳矣教授の追懷談、遺族の謝辭ありて式を閉ぢ、本館會議室に席を移して、茶會の間に故人の追憶をなして散會せり。

なお、翌六月一日の『國民新聞』はこの銅像を「風呂敷を着た翁の銅像」などと多少揶揄しながらも、右の「茶會」における関係者の、竹内久一の為人を髣髴とさせる追憶談を次のように紹介している。

正木直彦氏「竹内先生は純粹の江戸ッ兒で、漫談上手で、いつも教授連や生徒の仲間に入つて梁山伯〔伯〕氣分の結論をした」

島田「佳矣」教授「生徒と一緒に酒を呑むと猫ぢや／＼を踊り出したり、化粧行列などには猿田彦になつたりしてちつとも先生ぶらなかつた、私達〔私達〕が卒業した時、記念だと云つて尺度を下すつたさうして尺度は小さい目もりもしてあつて大きなものにも間に合ふ、君等も學校を出たら此尺度のやうに自由に伸びねばならないと諭された」

高弟石川「確治」氏「三十二年五月四日の事、當時先生は非常に貧乏してゐた、と近所の富豪が舊曆の五月五日に飾るから……と鍾馗を注文しに來た 先生は渡りに舟と思つて、「イヤ、舊曆でなくても好いでせう 新曆で彫りませう」と云ふ、富豪は『それなら願つたりかなつたりです』と喜ぶ 竹内翁一刻も早く金が欲しいので、『マテ／＼』と云つて裏の物置に行くや長さ二尺程の角材を持ち出して來て目の前で彫り始め五時間程で作り上げた、『先生之れは坐つてゐますネ』『鍾馗は立つて許りゐるから、俺が坐らしたんだ』に、富豪は其鍾馗を、寺崎廣業氏の所へ持參して見せると、廣業畫伯手を打つて喜び面白い、さすがは竹内君だ、乃公は其鍾馗を繪に描かうと云つて描いたのが日本に唯二つしか